

【デビューの日】・・・鈴木

新年度を迎え、コロナ禍4年目ではあり収束の見通しは全く立っていませんが、桜の開花のほうは例年よりずっと早く、とても暖かく過ごしやすい季節になってまいりました。4月は本当に良い季節だなとつくづく思います。植物が育つ様子を見ていると何かを始めたくなるような気持ちになります。

4月5日はデビューの日だそうです。1958年（昭和33年）のこの日、読売巨人軍・長嶋茂雄が開幕戦に3番サードでプロ野球デビューをしました。この日は新人にエールを送る日とされているのだそうです。長嶋のデビューは、国鉄のエース金田正一投手を相手にすべてが渾身のフルスイングにより4打席4連続三振であったことが伝説的に語り継がれています。その後、長嶋は4番サードの燃える男として、王貞治とともに「ON時代」を築き、巨人の9年連続日本一の立役者となりました。

また、4月5日は新しい生活がスタートする時期でもあるため、入学や就職でデビューする人たちにエールを送る意味も込めて、デビューの日とされています。そもそもデビューとは、社交界・舞台・文壇などに新人が初めて登場することや、作品を発表することで初舞台、初登場などの意味ですが、初めて挑戦すること・新たに何か始めること・ある場所へ行くこともデビューとして表現するようになりました。新学期となり、益子町の孫もついこの間まで元気いっぱいの幼稚園児でしたが、ピッカピカの小学校デビューとなります。あつという間で、時の経つのは本当に早いものだ、そしてジイジも7年、歳を取ったなあと痛感しております。



そして、ほんの小さなことでも細かいことでも良いのでデビューをしたいと思っていることがあります。コロナ禍になってからの初めてのゴルフ。いまだに実現されていない筋トレのジム。地元のスポーツチームの観戦（サッカー、ホッケー、特に野球とバスケットボール）をする地元応援。TwitterとかSNS等のつぶやき。船か鉄道で日本一周の旅などなど…。

外出に段々不安がなくなっている昨今ですが、その他いろんなことにチャレンジしたいです。

【身体が資本】・・・小倉

桜の開花が例年よりも早かった4月でありましたが、自分ことを考えることも出来ないほど忙しく、身体の不調に気づくことさえ出来ず知らぬうちに目の不調等をきたしていましたが何しろ身体が資本に感じます。病気がないことだけが「健康」ではなく、本当の健康とは、社会的、心身、生活面の三つが揃った状態に思います。

まず「社会的健康」とは、他人に必要とされ、何らかの役割をもち、社会の中に居場所があると感じられる、生きがいがあり、周囲の人と支え合う関係を築けている状況であります。「心身の健康」とは、心も体も健康であり、健康の土台となるもので、バランスのとれた生活習慣によってつくられたものであり、「生活面での健康」とは、仕事、家庭、自分の時間などのバランスがとれた状態で、収入や仕事など生活を維持するために必要な環境が整っていることに思います。



特別な贅沢はいらないし、周囲に迷惑をかけるけないという生き方はあくまでも自分の価値観であり徹底したくても出来ないことかもしれません。しかし出来るだけ周囲とよい関係を築くためにも自分本位ではなく、自分より相手のことを思って寛容に対処する心がけはいつになっても幸福な人生には大切です。三つの健康であるためにも身体は資本なので気をつけていきたいです。

先に述べましたが、私自身、仕事柄なのか、視力低下がかなり進み、改めて目を意識する機会にもなりました。緑が一層、爽やかに思えたり、ブルーベリーを摂取したりしておりますが、なかなか気分が万全にはいきません。

改善方法を模索中です。何か良い方法がありましたら、是非とも教えていただきたいと思っております。

【春爛漫・桜】・・・手塚

春といえばやっぱり“お花見”！日本人が愛する“桜”ナゼ日本において、新生活のイメージとして欠かせ

ないのが、“桜”。最近では、桜のシーズンをお目当てとした訪日観光客の数も増加しているとか。日本の春の景色は日本人だけでなく、世界で愛されつつあるのですね！古くから日本人に寄り添い、愛されてきている桜ですが、奈良時代、春の花の一番人気は、桜ではなかったようです。さて、何の花でしょう？それは、“梅”です！日本最古の和歌集である「万葉集」では、梅を題材としたものが100首以上と圧倒的に多く、桜よりも梅の方が愛されていた様子が伺えます。ところが、平安時代の「古今和歌集」・「新古今和歌集」になると、状況は逆転して人気はすっかり桜のものに。

その理由は、桜の“名前の由来”にありそう。これまた諸説あるのですが、「さくら」の「さ」が田の神様、「くら」が神様の座られる「御座（みくら）」を意味するという説が。この語源にちなみ、人々は桜の花の下で五穀豊穡を神様にお祈りをするように。そのため、田畑の周りに多くに桜が植えられ、桜は神様のいる場所として、特別に愛されるようになった、といわれています。ちなみに、この神様へのお祈りするための宴が、“お花見”の由来にもなっているようです。さらに、そのお花見が一般庶民にまで浸透していった背景には、なんと政治的な意図も！

江戸時代、徳川八代将軍の吉宗は、「享保の改革」の一環として、桜の植樹を推進。その狙いは、治安と治水対策、そして、世の中や幕府に対する不満を持つ人々に、お花見を楽しむことでガス抜きをさせるという目的があったとか！



さらに、冬場の霜などで緩んだ土手。そのまま梅雨の時期を迎えようものなら、決壊のおそれがある。しかし、土手に桜を植えておけば、春のうちに花見客によって地面が踏み固められ、決壊を防ぎやすくなる、という防災上の意図も込められていたとか！江戸城を囲む城壁だった“お堀沿い”をはじめ、水辺や川辺の土手が桜の名所であることにも、ちゃんと理由があったのです！たかが桜、されど桜……ここにもさまざまなストーリーが隠されていたのですね。